

## 人として生きる

郡山市立明健中学校 3年 小林 祐斗

僕は人間ではなく猿なんだ。そう決めつけることだってあった。僕は、両耳が前を向いていることから、幼い頃から両親に、「猿に似ているね。」と言われることがあった。自分はその当時なんとも思っていなかった。それが中学に入ると、いつの間にか友達からも、「猿みたいだね。」と言われるようになった。最初はあだ名程度で言われていたが、今では自分でいじめだと思えるようになるまで発展している。例えば、歴史の時間に豊臣秀吉がでてくると、僕の事を見て笑う人。僕のプリントの名前の欄に **monkey** と書く人もいる。クーラーが直で当たっている人に「お前みたいに、体毛があればあったかくていいな。」と言われることもあった。極めつけには「余計な知識を蓄えた猿。」や「人間じゃないしな。」と言われることもあった。自分はこんなことを言われた時、笑ってごまかすことが多い。そして家で自分を猿だと決めつけたり、なんでこんな耳になってしまったんだろうと思うこともある。これらの行動をいじめと思わない人もたくさんいるだろう。しかし、実際僕がされていることは、一步世界に踏み出してみると、人種差別になることだってある。

今世界ではこのような問題が起こっている。サッカーのスペイン一部リーグでの出来事だ。強豪レアル・マドリードに所属する、ブラジル代表のビニシウス選手が相手のチームのスペイン人応援団から、サルと連呼され試合が十分間中断する出来事が起こった。自分は小学二年生からサッカーを続けていたため、この出来事を知り、驚きと胸が苦しくなるような思いをした。そしてこの出来事が二〇二三年の五月二日に起こっていて、自分と同じようにサルと言われて苦しい思いをしている人が今のこの世界にいるのだと知りとても驚いた。この出来事は、ブラジル外務省がスペイン大使に抗議するなど国際的な問題になっていて、差別行為を行った疑いで七人が逮捕されている。自分が学校でされていることと規模は違うがやられている行為はほぼ同じであり、学校での何気ない行動や行動が世の中に出れば大きな社会問題に発展することの確かな証拠になった。

これまでの世界の人種差別の歴史を見ると、ドイツのユダヤ人差別、アフリカの黒人奴隷、オーストラリアの白豪主義、そして日本ではえた・非人、関東大震災時の朝鮮人差別など昔から人種差別はあったのだ。そして今でも差別は

なくなっているのではない。今から何百年も前にあった差別が今も続いている事を考えると、この世界から差別が完全に無くなるのにはとても長い年月がかかりほぼ不可能に近いと思う。しかし、差別をできる限り少なくすることは可能だと思う。自分がクラスメイトから猿と毎日のように言われていた時、たった一人だけ猿と言わずに自分の味方になってくれる友達がいた。その子は僕が猿と言われていると「やめなよ。」や「かわいそうに。」など僕にとってとても嬉しい言葉をかけてくれる。僕が悩みを抱えていた時も、しっかり寄り添って、悩みを聞いてくれた。逃げ場のなかった僕にその子は逃げ場を作ってくれた。その時僕は助けられた側の人間だった。そして、辛い気持ちの中でも助けてくれる仲間がいれば、幸せな気持ちが生まれることを知った。辛いという漢字に一本、線を加えれば幸せになるのと同じように、辛い気持ちでも何か手を差し伸べれば幸せが生まれるのだ。

世界の人種差別から見れば、僕は助ける側の人間だ。線を加える人なのだ。僕は今まで辛く苦しい思いをしてきた。そんな自分にしか分からないことがたくさんあると思う。僕は猿と言われていても、学校に行って勉強ができています。辛く苦しくても、勉強ができ部活ができご飯が食べられるのだ。生きていることこそ人権だと考える。人権をもっていない人などいないのだ。世界から人種差別をなくすことは極めて難しいことだ。しかし僕の実体験やサッカーのスペインリーグでの出来事を共有できる仲間がいれば、差別について考える人が増え、少しずつではあるが、差別をなくす道のりを進んでいけると思う。今の中学では話を共有できる仲間は少ない。しかし高校に入れば、新たな仲間を実体験を話せると思う。長く終わりの見えない道のりでも誰かが始めなければ、終わりを迎えることはできないだろう。自分の体験から自分と同じような思いをする人は、これから増えてほしくはないと思う。自分は辛い思いをした人から、させる人へは絶対にならないことを心に留め、一人一人の人権を大切に、人々が楽しく平和に暮らせる世界に向け、一歩ずつ歩みを進めていきたい。